

な か ま

発行
佐倉市立中央公民館
編集
なかま編集委員会
〒285-0025
佐倉市鏑木町 198-3
電話 (043) 485-1801

山の音楽会 ♪----- 古屋 政憲
飛行機----- 金親 邦行
犬との関わり----- 伊東 明広
ウン・フン・フーン----- 鶴田 行男

レイテ島慰霊

西崎 正夫

私は今年 8 月 23 日から 5 日間、レイテ・セブ島慰霊団に参加した。これで 5 回目となる。

2000 年に、佐倉連隊（57 連隊）の大隊長であった長嶺さんから「私も年ですから今回が最後の慰霊となります。一緒に参加しませんか」とのお誘い。私は遺族ではないが郷土史家として初めて参加した。

57 連隊は太平洋戦争当時、レイテ・セブ島で米軍と激戦し 2500 人の兵員中、僅か 118 人しか生還できなかった。レイテ島全体では 8 万 5 千人の兵員中 5 千人の生還者である。

私は今年 8 月 23 日から 5 日間、レイテ・セブ島慰霊団に参加した。これで 5 回目となる。

2000 年に、佐倉連隊（57 連隊）の大隊長であった長嶺さんから「私も年ですから今回が最後の慰霊となります。一緒に参加しませんか」とのお誘い。私は遺族ではないが郷土史家として初めて参加した。

57 連隊は太平洋戦争当時、レイテ・セブ島で米軍と激戦し 2500 人の兵員中、僅か 118 人しか生還できなかった。レイテ島全体では 8 万 5 千人の兵員中 5 千人の生還者である。

族の方からは日本から持ってきた卒塔婆も捧げられた。慰霊後、北端の小高い丘に登ると一本のヤシの木が立ち、小雨の中、カリガラ湾の水線が望みできた。

昨年、第二大隊長であった長嶺さんが 94 歳で亡くなられた。またリモン峠の初戦で戦死した藤井少尉の妹さんは、10 回目の慰霊を果たして昨年亡くなられた。峠から勝山高地へ至る尾根道、遙か紺碧のカリガラ湾を見下ろし、遠くサマル島を望みながら「お兄さあーん」と泣きながら呼んでいた藤井さんであった。

今回の慰霊団の参加者は 5 人と減ってしまった。慰霊団団長は「2 年後、20 回目の慰霊はもうできないかもしれない」とぼそりいう。まことに残念なことである。

レイテ島の皆様へ
11 月 9 日の台風 30 号により被災された方々に対して、心からの御見舞いを申し上げます。
(編集委員)

山の音楽会♪

台風は、低気圧に変わり、日本海を北上中。今年の山行きは、娘の希望により、常念岳と上高地散策。

弱風小雨の中を、常念小屋へ出発。ところが稜線へ出たら10分を超す強風雨。あわてて、小屋へ逃げ込んだ。

夕食まで娘は、部屋で休憩。私は、小屋主の山田さんから、常念坊の山岳信仰、一の俣沢の廃道、ヘリでの荷揚げ、北アルプスの眺望の話を聞く。

私から、息子の穂高はおなかの中で、穂高岳に登ったこと、娘とは滝を見に毎年山に登っていること等、話をした。夕食は、本格的なデミグラスソースのハンバーグ、生野菜のサラダに、茄子とガンモの煮つけ。うまい！ 負けたな。

1時間後、食堂の入り口に、「第十三回常念音楽祭フルートの夕べ」と幕が張ってあつ

た。

音楽隊は団長を除き全員女性。元NHK交響楽団フルート奏者の細川順三さんとチェロ奏者の奥様、その教え子の面々15人。東京音楽大学、フェリス女学院大学、東京芸術大学の学生と卒業生やプロ。みんな、楽器を担いできた。フルート演奏後、リズムダンスを、客も小屋の人も参加して踊る。次は、全員で合唱曲は、「見上げてごらん夜の星を」、「小さい秋みつけた」。締めは、小屋主の山田さんの安曇節の朗唱だった。

演奏を、生で間近で、聞くことが出来て感動！ 音楽の溢れた、楽しい夕べとなった。ワインの酔いも回り、幸せな気持ちで眠りについた。アルプスの山の上で、フルート演奏会、本格的なハンバーグ、思いがけない、うれしいサプライズであった。

翌朝、強雨風の中を出発。

(王子台 古屋 政憲)

犬との関わり

我が家の犬は今月で15歳である。離乳食が始まってすぐ飼いだしたので約15年の付き合いになる。人間の年齢に例えると76歳位になるだろう。最近では歩くのも随分と緩慢で走ることはほとんど出来ないが、朝夕の散歩は毎日欠かすことなく元気に出掛ける。

犬を飼うことになったきっかけは、息子が学校の関係で家を出る事となりその寂しさを少しでも紛らわすためにも犬を飼いたいと家族が言い出したが、自分は飼うのが反対であった。可愛いのは分かるが、生き物であるからには無責任には飼えないし、それなりの責任が伴い、なお且つ、何かと生活の上で制約が生じるからである。

ところが、飼ってみるとこれが言葉では言い表せないほど可愛いものである。人の心を掴むのが実に上手で、怒

られている時、可愛がってくれる人に久しぶりに会った時のうれしさの表現等、本当に癒される事が多く、随分と慰められたものである。飼う前は反対であったが、一番にはまったのは自分である。

人間が犬との関わりを持ち出したのは1万年前位といわれる。それ以来ペット、番犬、猟犬、災害救助犬、盲導犬等、幅広く人間と最も深く関わりを持って飼われていた。

又、日本では、江戸時代五代將軍の頃、人間より大事に扱われたとの記録もある。

これからは一段と高齢化社会に向かつていくが、各種ホーム等では犬と共に生活できる施設も増えるだろう。人と関わりがより深くなり、役に立てる幅がさらに広がると思われる。

我が家では家族の一員であり、いつまでも元気でいてほしいと願うのみである。

(王子台 伊東 明広)

飛行機

私は飛行機に乗ることが結構好きですが、海外にはあまり行きませんが、国内線で乗る飛行機といえばボーイング737が多いようです。外観上はあまり大きな特徴がなく小型で地味な印象ですが私は結構好きです。1968年就航で現在も生産が続けられているモデルですが、名前と外観以外はほとんど新しくなっているようです。

ところで737といえれば私などは727を思い出します。セブントーセブンと書けばわかってもらえるでしょうか。橋幸夫と吉永小百合がデュエットで「夢のジェット機727：そこは青い空だった」と歌っていました。

1966年頃ですから客室乗務員のことをまだスチュワードスといった時代で、映画の中で吉永小百合、十朱幸代、和泉雅子が3人もスチュワ

ードスで共演していました。ジェット機もスチュワードスも憧れの存在で、そこに憧れのスターが出てくるのですから大変なものでした。3人も若く美しく、そしてなによりほんとうに明るいのが印象的でした。

しかしまた727は赤軍派による「よど号ハイジャック」事件をはじめとして国内で何回もハイジャックされた飛行機でもありました。世界中では727が180回、737は96回ハイジャックされたそうです。また2001年9月11日のあのテロ事件でハイジャックされた飛行機もボーイング757と767でした。

そして現在まで時は過ぎましたが、なかなか世界は平和にならないようです。凡人の私にも何かできることがあるばと思っているのですが…。

(染井野 金親 邦行)

ウン、フン、フーン

人は、毎日食事をし排便をして生きている。おいしい食事に満足したり、気持ちよく排便できると爽やかで軽やかである。

しかし、いったん、糞づまり便秘になると大変なことになる。昨年入院、点滴と読書三昧の毎日が続き排便が滞り、糞づまり脂汗をかくことになった。ついには恐る恐る自らの指を突っ込む思うに任せず、SOSとナースコール。7、8回ナースが指で上手に掻き出す「摘便」。浣腸してトイレで「ドバツ」なんと爽快なことか。

先日も便秘になり苦労し、やっとでたので妻に「昨夜2時くらいのが出た。今朝も挑戦して5時くらいのが出た」と言った。すると妻は「私なんかいつも柔らかくスルツと出るよ」と、「僕だつて普段は気持ちよく長々と出るんだ

けどな」と言うとなんか得意げに「毎日3度、このくらいのが(長さ25センチ位を手で示す)出るんだから」と、「こんなことで、競い合うことでもないね」と言うとなんか大い口を開け歯をむき出し大笑い。「夫婦ならではの会話だね。普通じゃ話せないね」と言つてまた笑いが続いた。

「出物腫れ物所嫌わず」数年前の2月箱根の明星・明神ヶ岳登山中、妻は急に便意をもよおし雪上でスーパードンに「お花摘み」。リュックに結わえられ、鼻先で揺れる袋は興奮ぎめであった。その後は、そーと穴に埋め、紙だけは持ち帰るようになっている。

ふと父に「いっぱい飯を食い、いっぱい肥やしを作れ」と言われたことを思い出す。

(上志津原 鶴田 行男)



12月の黒板

『なかま』の原稿を募集しています！

『なかま』の2ページと3ページは佐倉市民の皆さんから投稿いただいた記事を掲載しております。

『なかま』の原稿は、自由テーマを原則としています。「出会いと別れ」、「旅の思い出」、「祭り」、「私のふるさと」、「私の健康法」など何でも構いません。

原稿の字数は、650字（13字×50行）以内です。また、掲載するにあたり常用漢字への変更や、句読点等の修正をさせていただくことがあります。

問い合わせ先

佐倉市立中央公民館 TEL043-485-1801

〒285-0025 佐倉市鐺木町198-3

<お詫びと訂正>

平成25年11月号の1面の内容に訂正がありました。

2段目11行目「幅員19」の後に単位がありませんでした。

正しくは「幅員19㍎」になります。

謹んでお詫びいたします。

さくら道

子ども時代にはしばしば星空を見上げた。春には北斗七星を、夏には天の川を、秋にはベガサスを、冬の澄み切った天空にはオリオン座を探し求めた。そして、遠い宇宙に夢を馳せたものだ。

退職後3年が過ぎようとしている。夜間の防犯パトロールに参加を始めたので、夜空を見上げる機会が増えた。近所やサークルの仲間にも恵ま

れて健康で穏やかな日々を送っている。経済的にはともかく、時間と気持ちのゆとりを得て人間的には最も充実している時を過ごしている。

佐倉に移り住んで30余年が経った。子供達も元気に巣立って行き、今は妻と2人だけの生活だ。星を見る度に、緑に囲まれた環境と歴史と文化に恵まれたこの街に住んで良かったとつくづく思う。

（長谷川 祐作）

あとがき

今年の中秋の名月はすばらしい満月でした。かつて道元は日本の美しい自然・四季を「春は花夏ほととぎす秋は月冬雪さえてすずしかりけり」と歌いました。

ところで、最近では気象の変化が急激になってきている感じがしませんか。冬の豪雪や夏の猛暑・雷雨・竜巻。ほどよい季節の春や秋は短く、厳しい暑さ・寒さは長い。日本の四

季に温和な良さが失われてきたように思うこの頃です。

こんな時節ですが、皆様から『なかま』に寄せられたエッセーには、旅の思い出や家庭でのちょっとした出来事、趣味のことやボランティアなど、さまざまな歴史や温かい思いが感じられて、共感するものがあり、ほっとします。すてきなテーマを温めている皆様からのご投稿を、楽しみにお待ちしております。

（岡本 治之）